

私の引き揚げ体験記 ～戦後50年をふり返って～

中間市 貞末 孝子

8月6日広島に、8月9日長崎に投下された原子爆弾は、人間によって作られそして尊い人間の命を奪い去ってしまいました。このことは決して過去の出来事として風化されてはならないことです。今年はその日から50年目にあたります。また、8月15日の敗戦からも50年目にあたります。その50年前を考える時、私にとって決して忘れることのできない事実をもっています。

5才の時、旧満州(現在、中国東北地方)に渡りました。新京などで豊かな外地生活を送り、四季折り折りには、あの広い広野をかけめぐるといふ、大陸育ちの日本人学校での生活を送りました。山に登れば季節ごとに咲き誇る花々とたわむれ、ロバに乗ったり冬はスケートやソリを使って友達と仲良く楽しく遊んだり、雪でカマクラを作ったりなど、数々の幼い思い出が目前にあらわれます。昭和19年、父の役職のために旧満州から北朝鮮に渡りました。その頃は最も厳しい時節であり、朝鮮に渡る時には連絡船がいつ魚雷を受けるかわからないため、身体に救命具をつけて命からがら北朝鮮の日本人学校にと転校していきました。

この年は男の人はほとんど兵隊にとられる身となり、私の父もすぐに召集命令を受けて入隊し、とっても悲しい想いをしました。父に会いたくて母と妹と面会に行きましたが、なぜか父は上官から殴られているのです。その姿は忘れられません。きっと父が私達の姿を見つけて一刻も早く会いたくて面会の手続きをとらず、失礼な行動をとったからだろうと思います。父は私達に一言もいいませんでした。それっきり父は遠くに行軍していき、敗戦と同時に日本に復員していたのです。

ところで、当時私は一日入隊といつて兵隊と共に生活する慰問にも出かけたものです。

昭和20年時はとても大変で、食糧不足が一段と厳しくなり、海に沈んだ米を食べたりコウリヤン米を食べ、一方では常にリュックサックには軍足の中に食塩といり米をつめこんで、いつでも避難できるようにしていました。

下校途中B29の爆撃が激しく、男の先生が自転車で「伏せれ」と声をからして叫び、死にものぐるいで道の溝に伏せたり、死にものぐるいで家路にたどりついたこともありました。

昭和20年8月13日疎開命令が出て、それっきり我が家に帰られずに、大きなリュックサックをからって野宿をしながらひたすら歩き、山を越え、川を渡って着のみ着のまま日本に向かって歩きました。そんな引き揚げの体験をもっています。

38度線を渡って日本にたどりつくまでの2年間は、子供心にも何を考えたらよいのか、まともに思うどころか、毎日生きるために、冬は凍死をしないために必死で生きてきました。収容所の中では集団生活、集団ごろ寝でした。朝起きると隣の人が死んでいる姿を見て、明日

は自分の命、家族の命と苦しみの毎日を体験し、『もう早く日本に帰りたい。もう戦争は絶対にいやだ』と、夜親子で外に出て星にむかって泣き叫んだことがたくさんあります。栄養失調で下の妹を亡くし、その収容所の共同墓地に埋めてきました。また、私の目前で男性が銃殺される姿を見た時はくるわんばかり、今でも忘れていません。

亡くなった人を共同穴に運ぶ仕事の手伝いや、使役といって山から大木をおろす仕事についていったこと、収容所での生活の悲惨さ、母はもちろん、女性が丸坊主で顔にシミをつけていることに疑問を感じたこと、葉の代わりにミミズを煎じて熱を下げたこと、日本に帰るまでの2年間風呂に入らず熊の足のようになっていたこと、収容所ではシラミ取りが一日の日課のようになり、勉強の「べ」の字もしなかったこと…など。

このように命からがらの引揚げのことを述べ、これからの世の中が変わらないようにと私自身願っています。

当時、子供や年寄りの人が置き去りにされていた事も知っています。私も一度は母が倒れた時は孤児になる決心を子供心にもしたものです。

今年の3月で定年退職をした私ですが、教師生活の中で子供達に伝えてきた事は、「平和」を守るために私達の身近な生活をしっかり反省し、日頃から新聞や本を読んで世の中の事を学んだり、基本的人権を守るために人とのかかわり合いで相手を傷つけ、差別をする、無視をする、そんな人間にならないために、自問自答することが「平和」への道すじを求めることになるよね……と。

「平和」への原点は人間の痛みのわかる心をもつことだと言われています。まさにその通りです。多くの戦争体験をしてきた人々の心には、戦後50年たっても戦争の傷跡は深く残っています。しかし、戦争を知らない世代が多くなっているのは事実です。だからこそ、次から次への世代に「平和」を守るために、人類が起こしてきた過ちを繰り返さないためにも、戦後50年を一つの大きな節とし、沖縄や広島、長崎が美化されることのないように、戦争体験者の語りを聞いて「平和」と「人権」が守られるよう学び続けて行動できる人間に、また真実を語り継いでいける人間に成長してほしいものと深く思い願っています。